
バクの見る夢 CASE 2

杉月正一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バクの見る夢 CASE2

【Zコード】

Z5129A

【作者名】

杉月正一郎

【あらすじ】

知っているはずなのに、知らない。覚えているはずなのに、覚えていない。あるいは、知らないはずなのに、知っている。覚えていないはずなのに覚えている。そんなすれ違いの話し。もしくは、彼女の強さの前には、誰も彼もが意味を成さなかつた話し。それでなければ - - - ちょっとした、思いで話し。あとに続く、詰まらない話しだ。

そこは夕と夜の間の出来事。ギリギリまで学校で粘っていたけど、もうそろそろ

帰らなければならぬと、教室にランドセルを取りに戻ったとき、私はその少年に会つた。

夕闇の教室、もう誰もいないので、独りの少年が眠つていた。

二人目

このボク、ばくもとじつき 猿本樹は人殺し目的で、その校舎内に入つていつた。

学校の中は閑散としていた。生徒はほとんどいない。いる必要はないからだ。

ボクもターゲット意外のヤツには用はないし、いたじりで、会話なんかなりたたないだろ。

世界を見回す。灰色の校舎、色はない。

「…彩色を忘れたのか？一流私立の名が泣くなあ」

そう一人じかてみる。何しろこの高校はボクの通つている高校の、同じ私立だが偏差値20は高い、名門だからだ。

「ガンバつて高校受験して、手に入れた学校がこんな世界とはね…」

階段を昇る。確かターゲットは一年八組。…組の数字が高いほど『優秀』らしい。一応のプロフィールは聞いていたが、詳細は聞かなかつた。

ボクの場合はフイーリングだ。まずは会つてみないと、殺し方も定まらない。

一年八組のドアの前に立つ。当たり前の話しだが、結局ここまでに誰ともすれ違わなかつた。

現在AM8時半だ。この時間なら、間違いなくターゲットは教室にいるはずなんだけど…。

耳をすます。教室の中から若い男女の談笑が聞こえる。かなり盛り上がつているようだ。

間違いない。ボクは引き戸に手をかけ、ガラリとドアを開けた。

教室には合計30人の男女。30人分の机があつた。

さて、ターゲットはどこかな？と、ボクは初めて入る教室に、ズカ

ズカと遠慮なく入っていく。

クラスの人間は誰一人ボクに気付かない。まだターゲットがボクのことを認識してないからだ。ボクのことを認識してくれなくては、例えボクが彼等にナイフを突き刺しても、彼等はなにも感じないだろう。

今日の前にいるのは30人の男女。この中からどうやってターゲットを見つけるか？もちろん、ターゲットの顔は知っている。だけど、そんなものはやくには立たない。名前だつてそうだ。偽像偽名は当たり前。

念のため、やつと顔を見るが、やはりターゲットの顔はない。

名前を呼びかけてみようか？なんて考えてみるが、偽名を使っている場合、怪しまれてバレる可能性がある。それは大変まずいので、ここはスタンダードに朝の挨拶から始めるか。

ボクは息を吸い込み、教室に響渡るように、できるだけ明るく。

「みんな、おつはよ～」

…普通に挨拶をした。

一瞬、ピタリと教室が静止した。

む、アプローチを間違えたか？と焦った瞬間。

「おつはよー！少しあそいんじゃなーい？」

と、元気な声が返ってきた。

教室の真ん中、女生徒に囲まれて談笑していた、髪を肩口にまで切り揃えた、目のクリクリした女生徒。

それが、ボクが今回この世界から抹殺する相手とのファーストコンタクトだった。

私こと木下紗裕は、自分でいうのもなんだか優等生だ。

この『有名大学に入るためには命を賭ける!』と謡つこの学校でクラス委員を勤めるくらい。

今日も朝のホームルームが始まる前、まだ誰も来てない教室に一番乗りし、せつせつせつせとホームルームの準備をし、担任が遅れてくるらしいので、代わりに欠を取り、ようやく登校してきたクラスメイトと全員の出欠を書き込み日誌を職員室おいてきて、さて、ようやく一段落して友人と談笑していたら、やたらと眠そうな声が教室に響いてきた。

「みんな、おつはよ~」

む、と黒板の方を見る。

そこには声の通りやたら眠そうな男子が突つ立っていた。

背は割と高い。おそらく一八〇近いだろう。髪はくせつ毛で目にか

かるくらいの長髪からした田が覗いている。完全に校則違反だが、まあいい、それくらいで田くじら立てるのは生活指導の先生だけだ。クラス委員とはいえ、そこまで文句を言つたら口うるさいだけだろう。

「おひはよーー・ちゅうと遅いんじやなーい?」

私はおざなりにならないよう、朝の挨拶する。

ちなみに五分遅刻だ。先生が遅れてくるからいゝものを。

周りの男子も

「よー」

とか

「オハー」

などの挨拶をする。

しかしその男子は、私の方を見ると、真っ直ぐ私の方に歩いてきた。

あ、あれ? コイツだれだっけ?

その見覚えのない男子は、妙にフレンドリーに私に話し掛けてきた。

「いやいや、朝目覚ましが鳴らなかつたり電車が遅れたり自転車がパンクしたり次のバスが来なかつたり妊婦が産気づいたりいろいろあつてさ」

「嘘臭い遅刻理由のオンパレードね…」

私は半眼で彼を見つめる。…駄目だ、どうじても彼を覚え出せない。いや、私は彼のことを - - - 。

私が彼について何か気付きそうになつた時、彼が『さも心外』といった感じで口を挟んだ。

「おじおじ長い付き合いでなる幼なじみの『いつ』を信じてくれるかい？」

その男子は『なんてことだー』と、大仰に天を仰ぐジエスチャーをするが、眠そうな目も手伝つて、大あくびしているよつとも見える。

幼なじみ…？幼なじみ。そう、なんで忘れていたのか？私と彼は小中高と同じ学校に通う幼なじみの腐れ縁ではないか！

「あんたの寝ぼすけつぶりには定評があんのよつ…えーと…」

「猿本樹だよ。忘れちゃつたのか？」

樹は覗き込むよつて言つ。

忘れて…？いや、忘れていない。ただ私は彼のことを - - - 。

「オレの席は、お前の隣だよな？」

「え？ああ、うん。」

そうだ、今は私の友達が借りて使つてゐるが、もともとそこは樹の席だ。

その証拠に隣の女生徒に
「「めんねー？またあとでね紗祐」と言われ席を譲られてる。

樹は席に座り、あぐびを一つすると、『どうした？』といった顔で私を見てきた。

「…あれ？」

「なんだよ？なんかおかしなことでもあったのか？ほけっとして。」

おかしなと「…？」いや、おかしなと「ひなんてない。おかしなと「ひなんてない。」

「えつと、樹？」

「なに？」

「なんで私服？」

「…………」

「なんで鞄も持っていない？」

「…カ、カジュアルフライデー？」

「今日は金曜だ…！」

私は間髪いれずツツ「ミミを入れる。

「ま、まて、大丈夫、こ、更衣室に着替えを用意してあるー」

「ならやつたと着替えろーーー！」

私はつい大声を出してしまった。

樹は焦つた様子で教室を出ていく。

またくいちがボケてるつーの

入れ代わりで教室に担任教師が入ってくる。馬鹿め樹。あなたは遅刻確定だ。

「ふつ、 危ない危ない。」
男子更衣室は教室のすぐとなりにあつた。

「ふう、危ない危ない。」

最初のうちから仲の良い設定にしておこうとしたが、『幼なじみ』ということで近づいたが、そこが失敗だった。

「む、うはボクに会わせてくれるナビ、ボクがむ、うひ会わせりれる
わけじやないからな。」

男子更衣室はロッカーが並んでいて、ところどころから野球のゲームが落ちている。

「なるほどね、野球部のをかわりに使っているのか

ロッカーを片っ端から開ける。

どつかに制服ないか…？頼むから用意しといてくれよ…？

田舎でのものはすぐみつかった。JUN-寧に教科書入り鞄に上履き付
き。ジャージもある。

「いたれりつくせりつてところかな？」

さつさと着替え始める。さすがに私服には違和感覚えるか。今度からは転校生つて肩書きにしておこう。しかしそうするとある程度仲良くなるまでに時間がかかるな…幼なじみで転校生？どんな運命的再会だよ。これから殺そうつて相手に。

着替え終わり、一息つく。

どうせ授業は遅刻だ。現状を把握するために、JUNはサボらせていた。ただこう。

さて、話しをまとめるか。驚いたことにターゲットは本名を使っていた。
いや、当たり前の話しか、顔にも面影があつたからな。

今現在9時前。今回のタイムリミットはせいぜい放課後といったと

「 ころか。

それまでに殺せるか?

「微妙なところだな……」つそのこと自殺でもしてくれるのが、ベストなんだが」

人を殺すというのはとにかく労力のいることなのだ。なにしろ、ほおつておいたら五年近く死なない生き物。こいつらなんでも、そこまではまてない。

とにかく、わざと見みたいなミスは控えないと。また『世界の敵』あつかいされたらかなわないからな……。

木下紗祐。ずいぶんと幸せそうだつたな……そんなヤツを今から殺さないといけないなんて、仕事とはいえ、本人のためとはいえ、イヤになる。

「 言い訳だな、どうにもね。」

ボクは頃合を見計らい、男子更衣室を出る。じつやう一時間は無事終了したらしご。

わて、木下のところに行こうか、と顔を向けたとき、なんかすんぐい目で睨まれた。

「う、なんか近づけないオーラがバリバリなんですけど……？」

やつぱり授業をサボるのは良くないな。

「 やあ、おつかれ」

彼女にむかって歩いていく。

授業が始まつたが、樹が帰つてくる気配はない。

あの馬鹿…授業サボるきね！

ひづ、無遅刻無欠席を誇る私は、この手のサボりにはじつにも不寛容なところがある。

おかげで授業にみがはいらないじゃないか！

と、一人イライラしていると、私宛てに手紙が回ってきた。

『猿本くんどうしたの？』

隣の席の友達からだ。

知らん知らんとジエスチャーで答える。

その口は私のジエスチャーを見て、また手紙を書いてよこした。

『紗祐つて猿本くんと仲いいよねえ？』

む、…これはなにか嫌なフラグがたつた気がする。こう、女の口得意の邪推と好奇心の入り交じった、『恋愛関係大好きフラグ』が

！…？

私は慌てて返事を書いて渡す。

『ただの幼なじみだし。誰があんな寝ぼすけ…』

と、真摯にそんなことはないと教えたのに、友達は一いや一やはと笑い出した。その顔は『ムキになるのが怪しいなあ。今日のお題の話題はこれで決まり！』といった感じの表情だった。

…………もうこいや。

なんとなく疲れて窓の外を見る。呆れるくらい晴天だ。…こんな日じゃ、少しくらいボケても仕方ないかな？

「では、次の問題を～木下～」

「え？」

不意に先生に指された。や、やばい。何も聞いてなかつた…！…！

「あ、えっと、その」

「なんだ木下、聞いてなかつたのか？」

「す、すいません」

「まったく、摸本のボケが移つたんじゃないのか？」

「なつ…」

クラスの中でクスクスと笑いが起きる。

穴があつたら入りたいとはこの心境だ。樹め…帰つてきたら復讐してやる。

と、私は半ばハつ当たりのような怒りを覚えていた。

「ああ木下。うわさの摸本がいながどうなつてゐる？お前の日誌には30人全員出席になつてゐるが？」

制服を忘れたのでとりに行つてます。

…なんて説明すればいいのよ。

一時間目が終了し、制服に着替えた樹が
「おつかれ～」
などと眠そうな声で入ってきた。

「…いつ寝てやがったな…」。

私の殺気に感づいたのか、樹は少し引き気味に私に聞いてきた。

「えーと…次の授業なんだつけ？」

樹が鞄から教科書を取り出しながら私を見る。

私はニツ「コリ笑つて。

「教科書は必要ないでしょ？ 貴方は睡眠学習の方がお似合いでな
くて？」

と皮肉つてやつた。

ぶいっと樹とは反対の方向、窓の外を見る。ガラスに映つた樹は所
在なさげに下をむくと、コソコソと席に座つた。

そして、まるでなにかに黙祷するかのよつて手を閉じる。

私はその時彼が、どこか遠くに行つてしまつよつた錯覚を覚えた。

夢の中で、ボクは後悔している。例え夢の中でもだ。

年令は今年で17になる。某私立高校に通つていて、学年は2年だ。

取り立てて特筆するような個性は持つていない。ボクのステータス
を表示して検索したら同じようなヤツが何万と出てくるだろ？

だけど、自分が平凡でなく異端だと自覚している。

そして、そんなボクはなんでこんなことしてこるのだ？

これはいくらなんでも・・・普通じゃないと直覚してこる。

ボクが、道を踏み外したのは、ある少女との出会いだった。

おそらくボクがまだ、ギリギリ、本当にギリギリ異端ではあつたけど『普通』の枠に入つていた時に出会った少女。

彼女との出会いが、高校の入学式。春風に舞う桜の花弁の舞台の上での出会いがボクの運命を決定した。

そしてそれが彼女の命運を左右した。

そして今回は木下紗祐。

木下紗祐のイメージはいつも泣いていた。泣きながらがんばる女の口。

それがつらいと思ひながらも、いつも一生懸命に毎日をこなしていた。

努力して努力して、がんばってがんばって、いつか、幸せになれるだろうと夢想して。

だけど、それはいつも空回り。彼女は知らない。誰かのために努力しても、誰かのためにがんばっても、結局、自分自身を幸せにはできない。

ただいま、三回目の休み時間。

授業は滞りなく進行し、昼休みまであと一時間残すのみとなつた。

ふと隣りを見る。樹は机に突っ伏し、惰眠を貪つている。

それはいい。今は休み時間だ。それをどう使おうが個人の自由だ。だが、しかし。

「全授業寝潰すつてのはどうこう了見なのよつ！？」

「んーっと大きな音で机を叩く。それでも、樹は『はつ！オレの眠りを妨げるのはその程度では役不足だ！！』とでもいいたげな感じで（きっとそうだ。そう決めた）無視を決め込んでいる。

うちの学校は進学校。寝ているヤツをイチイチ起こしてやるほど甘くはない。そして樹はそのシステムに甘えまくつて。このように午前中いっぱい眠りコケているのだ。

「まあまあ、多分榎本くん昨日遅かつたんだよ、ほら、試験近いし。

」

と、逆隣りの友人がフォローに入る。

「いーや、絶対コイツのはただ寝たいから寝てるだけよ！」

私は断言する。小学校からの付き合いなのだ。コイツの事は解りきつている。

「この男はね、小学校の時からいつも授業中に寝ててね三年寝たるうつて称号を手にしていたんだから！」

「それはまた…」

「しかも、このとき、夕方の教室、一人寝ていたアイツを起こしたとねてたのよ？」

思えば、あのとき、夕方の教室、一人寝ていたアイツを起こしたときから、私たちの腐れ縁は始まっていたのかもしれない。

「でもさ、寝てるのって怖いよね？」

「は？ なんで？」

友人が突然話題を変えたので、思わず聞き返してしまった。

「だつてさ、眠るときに、『もしかしたらもうつ日を覚まさないかもなんて考えたことない？』

「永眠しちゃうかも？ つてこと？」

「うーん… 何て言つたか、よく考えたら眠るときに『必ず起きる』って保証はないわけでしょ？ もしかしたら、そのまま日覚めないかもしないじゃない？ 現に、そういう病気もあるつていうし…。」

「…………」

私は、なぜか不安になつた。

樹はいつも寝てばかりだった。まるで現実を拒否しているような。

夢の世界を望んでいるような。

現実を憎んでいるような。

あの、放課後の教室。夕焼けというては憚られるような夕と夜の間。

その中、たつた一人で眠っていた少年。

なぜか、誰も彼を起さなかつた。

誰も、彼を見なかつたから。

その姿があんまりにもあんまりで - - - 。

私は、
「起きないと、家に帰れないよ」
と声をかけたのだ。

なんとなく昔を思いだし、仕方なく、起しきりやるやうにした。

これは、純然たる仏心とこりやつだ。

決して、深い意味はない。

「おーい。樹へそりそり授業始まるから起きや〜？」

「うへ、うーん…」

少し樹がみじるべ。反応ありか？

「もつ食べられない…」

「……」

何て言つべタな夢を見ているのか。

「私が生きてこらつがこの寝言が聞けるとひま…」

少し、感動。

「うーん…もう食べられない…かもしない。…もつ食べられないかもしない…」

「疑問系ー？」

思わずシッ「!!」を入れてしまつ。

…結局、樹を起さずのは断念した。

勉強とはなぜするのか?と考えるとき、すでにそれは逃避に入っている。

「だからーー!そこは公式を使うのー積分もわからんいで、どーやってこの高校受かったのよー?」

「うへ、面倒ないです…」

なぜか、ボクは授業の復習りじこものを受けている。
どうやらボクが寝ているうちに、午後にテストが行われることが決定したらじい。

ゆえに、そのテストに合格するために、こんなやつたことのない勉強の『復習』をしているのだ。

…これでも、成績はいいほうなんだけどなあ。

「まさかアンタがここまで馬鹿だとわねー。寝てばかりいるからよー!」

木下は不機嫌だ。さつきも『復讐』してやるとは思つたけど、復習するはめになるなんて…』とかなり物騒なことをぼやいていた。

しかし、このシチュエーションはボクにとつては好都合だ。彼女が人払いしたのか、この休憩室には誰もいない。

…密室に一人きりと囁うのはかなりドキドキする展開なのだろうが、

「いい」は仕事優先だろ？。

「なあ木下、少し休憩して食事にしないか？」

殺す前に、聞いておかないといけないことがいくつある。

例えば - - - ビーで死にたい、とか。

「そうね。私もお腹空いたし、数学以外だつたら、頑張ればなんとかなるでしょ」

「いいえー頑張れません。とは口が裂けても言えない。

「やういえば樹、『」飯どうじてるの？』

「…………」

「まさか忘れたとか？」

「さよ、今日は断食日なんだ」

「こつから回教徒になつたのよー？」

木下はため息をつくと、自分のお弁当を差し出した。

「今から学食行つてもろくなもん残つてないわよ。……しうがないから私のお弁当。分けてあげる」

「…いいの？」

「貸し一つな。いつん勉強教えてあげてんだから、貸し一つな

「取り立てが厳しそうだ」

ボクは木下のお弁当から唐揚げを一ひとつみる。いつんなかなかつまい。

「うまいな。木下が作ってるのか?」

木下も弁当から唐揚げ食べ。

「うん、朝お母さんと一人で作ってるんだ。その唐揚げはお母さん作

「くえ……」

木下の母親、ね。

ボクはおにぎりを一つ貰う。…どうでもいいが、年頃の女のコが食べるのに適量な量なのか?明らかに多いぞ?男から見て1・5人前はあるぞ?。

「木下、よく食べるんだな……」

木下はペタリと動きを止める。

それから「ギギギ」と響きわたつた動きで「ひりひり」を見ると。

「あんな寝言こいつやつと言われたくないー。」

と、大声をあげた。

樹に私の出血大サービスで勉強を教えてやつてこると、元の通りに、あまつさえお弁当まで分けてあげた。なのに、返ってきた言葉は私を侮辱するような言葉……。

何がいけないのか。たくさん食べることは罪なのか?許されざる大罪なのか?それを、こんな男に断罪されるなんて……。

「イヤ、そんな感じに壊れられても……」

『何か見えない地雷でもふんでしまったのか?』と樹がボソッと言つ。

ふふ。地雷を踏んだらサヨナラよ?

セーヒ、どう料理してやろうかしら?

私が思案にくれていると。

「せつか、オレ午前中夢を見てたんだよな。…木下は、夢をみたりするのか?」

「…………夢?」

氣勢を削がれた。いや、何かそのワードには引っ掛かるものがある。

「そう、夢。といつても『将来の夢』みたいな抽象的なものじゃなくて、即物的な、寝ているときに見る夢」

ずきり、となぜか左腕に痛みが走る。

「木下は、いつもどんな夢を見る?」

樹は他愛のない雑談のように聞いてくる。

だけど、私にはわかつた。彼が、真剣に私に問い合わせているということを。

「私が、見る夢 - - - 」

「見る夢は?」

樹が怖いと思った。なぜか、目の前の少年が全然知らない人に思えた。左腕が痛んだ。

「 - - - きっとそれは錯覚だ。」

ここにいるのはいつもどおりの樹だ。あの誰からもほつとかれていた少年だ。左腕の痛みも錯覚だ。だって私は怪我一つおつてやいない。だから、錯覚なのだ。

「 - - - の前に、樹はどんな夢を見るの?」

それでも、答えることができなくて、質問で返すことになった。

「オレの？」

「アハ、樹の」

樹はキヨトーンとした顔をして、私を見返す。

あれ？なんかへんなこと聞いたかな？

樹はそれから困った顔をすると、田線を少しずらして。

「今は、木下の夢を見る」

そういった。

な、な、な、なんてことを言つてんだ！

樹が私の方を見る。ダメだ、田を合せられない……

「な、なに言つてんのよ」

かわいじて畠葉をつむぎだす。

だつて、これは誤解しようと思えば誤解するセリフだし、深読みすればするほど深読みしてしまつ……。ああー、なんか混乱してきたー！

「いい感じにテンパつてるとけど、大丈夫か木下？」

「い、樹がへんな」と言つからでしょー?」

「は? オレなんかおかしな」と言つたか?」

「く、ここの天然め…。天然は髪だけじゃなく頭にまで及んでいたか…!」

「ああああ、オレは自分の見てる夢を発表したんだから、次は木下の番だろ?」

樹はいつもと変わらずへらへらした顔で聞いてくる。

く、動搖するな、私。こんなに、適当に答えておけばいい、例えば
- - -。

「教室」

「教室?」

「そう、教室の夕暮れの夕と夜の間の夢を見る」

彼は、覚えているのだろうか? 小学校のとき、私と樹が初めて言葉を交わした、あの教室での出来事を。

「ふーん…」

樹は腕を組み、何か考えるように手を閉じる。

思い出しているのだろうか? 幼なじみである私と彼とでは思いでも

吸きない。

だけど、その風景だけは、私の心に強く残っている。

果たして、彼はどうなのだろう。

私がそのことを聞くとしたとき、彼は目を閉じたまま、口を開いた。

「夢は綺麗でも醜くても、いつかは覚めてしまつものなんだよね」

樹はまるで独り言のよう、言葉を紡ぐ。

「そして夢から覚めるその時は、一片の容赦も情けもない現実が襲いかかってくる」

「人の見る夢なんてのは抽象的にも即物的にも、現実に押し潰されてしまうものなのかな?」

樹は目を開く。その瞳は、私だけを見ている。

私はいいようのない不安にかられた。

いつも寝てばかりいる樹。もしかしたら彼は現実が嫌いなのか - -

左腕がずきりと痛む。

そして胸も痛くなる。

私は聞かずにはいられなかつた。

「樹はさ、『Jの世界が嫌いなの?』

「『Jの世界?』

「そう現実が

樹は少し戸惑つたような顔した。そして、『わからない』と呟いた。

その顔はいつか見た夕闇の教室の顔に似ていた。

「木下」

「なに?」

「伝えたいことがある。放課後教室に残つてくれないか?」

樹は、何か思いつめたように私に語つてくれる。

「…『J』じゃダメなの?」

「ああ、一人つきりで、話したいことがある。」

その時、昼休み終了の予鈴が鳴る。

「『J』をさまでした。」

樹は礼儀正しく礼をするとい、席を立つ。

「忘れないでくれ。放課後、教室でな。」

「一つ言つて休憩室から出でていく。

「二人つきで話したい」といつて……」

私は樹が出ていった扉を、本鈴がなるまで見つめていた。

これ以上の関わりは蛇足だ。彼女とボクが殺す殺されるの関係である以上、それは仕方のないことだ。

「さて、さすがにもう教室には戻れないよな」

教室には彼女がいる。下手に接觸して時間が延びるのは避けなくてはいけない。残された時間が多いとは言えないんだから。

「まずは証拠集めか……」

殺す前に、できれば自分が殺される理由を納得してもらいたい。

「……できれば自分から死んでほしい。」

「殺しあいになれば、勝ち目はないからな……」

証拠捜しのため、校舎内をウロウロする。

ホントは、証拠なんて必要ない。彼女の失態は明白で、誰がどうみても矛盾だらけだ。

だけど、どうしてボクは「こんなことをしているのか - - - ?

「逃げてるだけなんだよな、ホントに」

そして、見つけた。

最初の綻び。

ボクが教室に入つたときにできた矛盾点。

ふと窓を見る。田は完全に傾き、約束の時間まであと少し。

僕はポケットからナイフを取り出す。

方刃の刃渡り15センチほどの御影からもらひ受けた殺人道具。

女の口一人殺すくらいならわけのない凶器を、ボクは時間まで眺めていた。

「そろそろ起きないと家に帰れないよ?」

「ボクには帰る家がないんだ」

「アハハ」

「お母さんもボクの」とがキライなんだ」

「アハハ」

「ボクがいると、お母さん眠れないんだって。
だから、こつも学校で寝てるの？」

「うそ。家では眠らせてくれないから」

「お母さんの」と、嫌いなの？」

「わかんない」

「わかんないんだ」

「ヤハハ？」

「え？」

「ヤハハ？」

「アタシは…お母さんの」とおしゃだよ？」

「好きなんだ」

「うそ。こつもおひこでくれるわけじゃなにかど、アタシの」

「いいなあ。ボクは『気持ち悪い子供』ってよく言われるんだ…」

「いいなあ。ボクは『気持ち悪い娘』だ。って褒めてくれるの」と

「気持ち悪い？」

「うん。ボクと一緒に寝てると、なんだか気持ちが悪くなるんだつて。だから、そんなふうに褒めてくれるお母さんが羨ましい」

「ええ、アタシの血の母さんなんだからー。」

樹は結局、放課後まで戻つて来なかつた。

私は授業中、終止符を押さないまゝなじで、ほととぎすストもできなかつた。

『云えたいことがある』

これはあれか？やつぱりあれか？そういうイベントなのか？いつのまにか私はそういうフラグを立てて、樹とハンドまつしぐらに走つていたのか？

…思考がかなり混乱している。

そうだ、別に『愛の告白』を受けると決まったわけではない。樹とはずつと幼なじみを続けてきたのだ。今更、その『恋人関係』つてのは無理がある。きっと、なんか他愛のないことを言つて決まる。『お金かしてくれー』とか『宿題みせてー』とか。

そうだ。樹から『愛の告白』などありえないー。

とは思つても、この『キドキは止まらない』。

日は確実に傾いていく。あと少したてば、約束の時間だ。

：明確な時間を言つたわけじゃないが、おそらくあの時間だらう。

二人が初めて話した、夕と夜の間。

私はいつかの彼のように瞳を閉じて待つことにする。

- - - おわりく、私を起してくれるのは彼だらう。

それまで、私は瞳を開ける気はしなかった。

終わりは、いつだって呆氣ない。

きっとそれは夢から覚めるような素早さで、多少の余韻は残つても、

すぐに無意識して忘れてしまひ。

わあ、これから木下紗祐の物語りに幕を閉じよひ。

教室のドアを開ける。

時間は夕と夜の間。日が完全に沈む前のわずかな時間。

その中に、瞳を閉じて、今から起きた惨劇に祈りを捧げていひみな
な、木下紗祐の姿があつた。

「お待たせ木下」

「ええ、私を待たせるとほい一度胸ね

木下は瞳を開けてボクを見る。どうやら最初から起きていたようだ。

「すまないね。じつにも理由があつて。じつしても今日中に木下
に伝えたいことがあつたから」

木下は何かを察したのかなぜか少し身構えた。

「うん。それで、伝えたいことって?」

「そのまえに木下謝らなければならぬことがある」

「え?」

「テスト、サボつて」めん。せっかく勉強教えてくれたのに

「ああ、そのこと」

木下は少しホッとしたようなそぶりを見せる。

「そのことには気がしてないわ。アンタのできじやあ、受けとめていい点とれなかつただのうし」

「ひどい言わねようだ…」

「やうだ、そのまえに樹に聞きたいことがあったの」

「聞きたいこと?」

「やう、聞きたいこと」

「なに?」

「樹は覚えてる?私達が初めて話した日のこと」

「……」

ボクは答えない。

「あの日もこんな夕闇の口だった。一人とも家に帰れないでギリギリまで学校にのこつてて」

ボクは答えない、なぜなら - - -

「樹は私が起こすまで眠つていたわ。そして私達はそこで少しだけお話をした」

ボクは答えない。なぜならボクは - - -

「ねえ樹は覚えてる?あの時、樹は私のお母さんを - - -

彼女は何か、まるで懇願するような目で見つめてくる。

ボクは答えられない」とを答える。

「知らない」

ここでボクはようやく口を開く。

「そんなことは知らない」

自分の声ながら、なんとそれは冷たいことか。

ボクの否定的発言を聞いて、木下は - - - 彼女は、何か、悲しいようないいような、なんともいえない表情をした。

ボクは、ポケットの中のナイフを確認する。

夢の終わつまで、あともつ少し。

私は、彼が来るのを待つていた。

いつかの少年と同じよつこ、一人静かに眠るよつこ。

樹のいうことが『愛の告白』だらうがなんだらうが、私には、確かめたいことがあつた。

もしそれを樹が覚えていてくれたのなら、もしも、もしもだ、樹が『伝えたいこと』が『愛の告白』だとしたら - - - 。

なんてことを考えていた。

考えていたんだよ?

返ってきた筈は。

「知らない」

「そんなことは、知らない」

どいまでも冷たい、否定的な言葉だった。

「覚えて - - - ないの？」

私は、もう樹とは絶望的な隔たりがあると知りながら、私は聞いてしまった。

「覚えていないんじゃない、知らないんだ」

このとき、もう私は気付いてしまっていた。気付いてないことに、気付いてしまった。

「なぜなら」

樹は - - - 。

「ボクとキミは、出会つて覚えてないんだから」

樹は - - - 誰だったのか? - - - 彼は、誰なのかといつことにして

「なに言つてるの? 私達は、昔から幼なじみで、例え樹が忘れてしまつたとしても、私は - - - 覚えてるは」

見苦しく、もがいてみる。

だつて、私は覚えているから - - - 。

あの、一人ぼっちで残つていた教室を。

「それは錯覚だよ」

まるで、殺し屋。ううん死神みたいな無慈悲な目で私を見つめてくる。

「ボクが、そう思つように刷り込んだんだ。最初に出会つた時、ボクのことを思い出せなかつたろう?」

「あれ? ここつ誰だつけ?」

「それは、キミが忘れてたわけじゃない。ただキミが、知らなかつただけだ。そのとき、ボクが言つたセリフからキミはボクの役職を作つた」

「幼なじみの『いつ』とを信じてくれないのかい?」

「一度、キミに『認識』してもうえはあとは楽だつた」

「ならば、あの過去は?」

「キミはかつてにボクの過去も想像してくれた。さつきのも、想像が、きつと誰か違う人との記憶を流用して、作り上げたんだ」

左腕が痛みだしてきた。

「い、樹が何を言つているのか、私にはわからないわ……」

わかつていてる。わかつていてるのか。わかつていてる? わかつていてない?

「何が言いたいの樹?」

彼が言いたいこと、伝えたいことは、もうわかつていてる。だけど、

認めたくなくて、聞いてみた。

「「」の世界は、全部キミの夢なんだ」

彼は、静かに、そう告げた。

太陽はすでに完全沈んでいた。

太陽は完全に沈んでいた。

彼女は俯いて、左腕を庇つよう右腕で掴んでいた。

ボクは、話を続けなければいけない。

「いろいろと、矛盾点はあった。だけどキミが気付かないのも無理はない。制作者は観測者であるキミとは同じであって別物だ。無意識、つて言った方がはやいかな？」

辺りを見渡す。彼女の近くだというのに、教室はビック、あやふやな像を結び始めていた。

「だが、ボクのような『部外者』がはいりこんだことによつて、矛盾や綻びが顕著に表れ始めた…矛盾はすぐ修正されるし、綻びはごまかしがきく、ダマすのが本人だけならね」

彼女は小刻みに震え始めた。

ボクは続ける。

「例えばコレだ」

ボクは一つのノートを取り出す。彼女が今朝つけた学級日誌だ。

「キミが今日書いたものだけど、見えるかい、ここ?」

彼女は顔を伏せたままだ。

ボクは構わず言葉を続ける。

「朝の段階で、出席をとっているね、全員出席、見事なものだ。ただ、この時点でおかしい」

もちろん、最初からボクは気付いていた。

しかし、このことに対する矛盾修正はなかつた。それは - - - 。

「ボクは、遅れて教室に入ってきた、それなのに、教室には一人分の空いた机があつた、それはなぜか?いや、そのことは問題じゃない。誰か一人消えた?いや、それもたいしたことじゃない。」

彼女は力無く、床に座り込む。

ボクは続ける。

「問題なのは、そんな不可思議なことがこの世界ではまかりとおつてているということだ。それが、この世界が誰かの想像の中でしかなりたたない、できそこないの世界といつゝとの証明だ」

そして、最後にボクがここにいる理由を教える。

「ボクは、あなたをこの世界から殺すために、現実から来た者です」

窓を見る。そこには夜が。

いや、ただの黒が窓の上に塗り潰されてるよつこしか見えなかつた。

彼の長い話は終わつた。

左腕が痛い。いつのまにか、血が流れている。

ああ、そうか - - - 忘れていた。

私の左腕は、自分でつけた傷でいっぱいだったんだ……。

もう全部、思い出していた。この世界のことも、現実で起きたことも、私がしたこと。

それでも、私はもう一度聞いた。

「貴方は、本当に私の知っている樹じやないの？」

彼は、至極当然のことのように『やつだ』と呟いた。

「ボクの名前は摸本樹だけど、キミの作り出した摸本樹とは別人だ」

「やつ、なんだ」

「『』ねん」

「つづん。謝らなくていい」

「キミをダメしていた」

「私ほどじや、ない」

「……」

私は立ち上がり、彼を見つめる。

「私、どうしたらいい？」

彼はここで、始めて迷ったような仕草をした。

「キリを、この世界のキリを、殺す。そうすれば、キリせむとの現実に帰れるんだ」

「せつ、それで迷ってるんだ。私を現実に帰すかどうかで」

左腕を見る。その傷はあまりに醜く残っている。

「やつか、もう、夢から覚めちゃったのか…」

悲しい事を、たくさん思に出した。苦しい事をたくさん思に出した。

「…田覚める事が怖いくらい」。

私は、自分から田覚める事はできない。それは朝起っこりも、ないと起れない子供のよ」。

「…もじくは、彼の憐憫にすがるよ」。

「貴方が決めて、私をどうするか」

私はそう訴えていた。

ボクはポケットからナイフを取り出す。

そう、やるべきことは最初から決まっている。ただそれが正しいか間違ってるかがわからないだけだ。

ただ - - -

「ボクにできるのは、これだけだ

彼女は目を閉じる。

ボクは彼女について何も知らない。彼女が何に悩み何に苦しみ何に救いを見出すか、ボクにはまったくわからない。

だけど、だけど - - - これでいいのだろうか?

ボクはそのまま - - - 。

「させないわ

飛んできた机にぶつかり弾きとばされた。

「ぐ、う…」

それは的確にボクだけを狙つた攻撃だった。

なんだ? なにが起きた? この場は彼女の夢の中、第三者の介入なん

てことは - - - 。

「ま、まさか」

「あら、察しがいいのね『侵入者』さん」
そこにいたのは - - - 。

「貴女、なんでここに-?」

木下が『それ』に向かい合ひ。

有り得ない、アレは、木下の - - -

「あら、名前を呼んでくれないの? ふふつ 初めから名前なんて設定
してないからかしら? 所詮、名もなき友人Aだからね」

彼女には見覚えがある、木下の逆鱗りにいた女生徒だ。

「だつて、しかたないじゃない。紗祐には友達なんていないから、
イメージだけで、名前なんてつけなかつたのよ」

思えば、彼女はボク以外のヤツを名前で呼んでいなかつた。

「あ、貴女は一体なんなの!?」

木下が叫ぶ。

『ヤツ』は不敵に笑う。

「それは、そこで転がっている人に聞いた方が早いかもよ？」

『ヤツ』はボクを指差す。

木下に向かってボクは搾りだすように言つ

「木下、アレは木下の『制作者』だ…」

有り得ないが、間違いない。有り得ないけど、間違えようがない。

この木下が形作る世界で、自由に物を作つたり動かしたりできる者、それは『制作者』以外有り得ない…！

だが、しかし…-！。

「本来』制作者』は無意識の存在のはずだ。あんなように…意思をもつて行動するなんて有り得ない！」

それは半ば、自分に言い聞かせるような言葉だった。

「そうね、本来ならね。だけど、ある人が、かわいそうな私のために、私を造ってくれたの」

彼女はニヤニヤしながらボクに近づいてくる。

「現実に打ちのめされた、かわいそうな私のために作る

彼女がボクの前に立つ。そして - - - 。

「私の、私による、私のための、夢の楽園のために - - - ね！」

ボクの頭を掴み、女の口の握力とは思えない力で、ボクを壁に叩きつけた。

「ぐ、があああ - - - ！」

遠くで木下の悲鳴が聞こえる。

「あらあら打たれ弱いのね？それともアタシが強すぎるのかじりっ？」

ダメだ - - - この世界では、『木下紗祐』は無敵だ…。

「あんたは本当に厄介者だわ」

彼女はボクの襟首を持ち、左腕だけで軽々と持ち上げる。

「最初は紗祐が喜ぶから捨て置いたけど、紗祐に現実を押し付けるなんて、なに様のつもり？」

ナイフは - - - くそつ - 最初の一撃でとつと取り落としてる。

「私達は私達で楽しくやつてんのよ。邪魔しないでくれる？」

彼女が右腕を振り上げる。何しろあの怪力だ、一撃で終わりだらう。

「 - - 何か、手はないか? 頭を打つたせいか、まるで思考が働かない。」

「「歯」」たえがないわね。 - - それで、誰かを救えるとでも思つているの?」

手はある。手はあるのだ。 - - だが前回とはケースが違うのだ。それを彼女に使うのは - - 。

「貴方には何もなしえないわ。そんな貴方が - - 私達に構わないで」

いつか、そんなことを彼女にも言われた気がする。だけど、それで もボクは - - 。

「そんなどから、貴方はこんな目にあつのよ」

生命の危機乗じて、ボクの中でゾワリと何かが蠢きだす。 - - ダメだ。今は、抑えなければ。

「バイバイ、 × × 猫」

何か、呼びられない名前で呼ばれた気がしたそのとき。

「樹から離れなさい……。」

ナイフを構えた木下が、彼女に立ち向かっていた。

「やめなさい、例え紗祐でも、『制作者』たる私には敵わないわ」
その通りだ。彼女は余裕そうに振り返る。だが、一蓮托生であるキ
ミ達は……。

「そう、な、う、こ、れ、な、ら、ど、う、?」

そつ言つて木下は、自分の喉元にナイフを押し付けた。

「……。」

彼女がボクを取り落とす。

「が、は、あ、は、あ、」

くそつー、呼吸するだけで精一杯だ。

「やめなさい、紗祐。そんなことをすれば、夢が覚めてしまうわー。」

彼女が叫ぶ。

「そんなのと比べて覚めてるわよー。」

二人の

「紗祐」

が言い争つ。

「まだ、取り返しがつくわ。今なら、また紗祐の記憶を消してあげられる。また元通りの幸せな世界を演出してあげられる」

彼女は一步づつ木下に近づいていく。

「こないで！」

『制作者』はそれでも彼女に近づいていく。

「現実に帰つたら苦しいだけよ？忘れたの？その心の痛み。忘れたの？その腕の痛み。忘れたの？お母さんのこと」

『制作者』はもう手を延ばせば木下に触れられる距離だ。

「お母さん、のこと」

木下の手から、力が抜ける。

「そう、紗祐を苦しめる全てのことから、私が守つてあげる」

一人の『紗祐』が見つめ合ひ。

「わ、私は、もう、痛いのは嫌だわ……」

二人は - - - 正確には一人だが、その表情は同じ。今にも、泣き出してしまう」そ�だ。

ボクはそんな二人を眺めることしかできない。

「今まで、誰も紗祐の苦しみをわかつてくれなかつたじゃない。誰も助けてくれなかつたじゃない。でも、私は違うわ。だつて、貴女だもの。貴女を苦しめるすべてから、私が守つてあげるわ」

それは違つと思つた。間違つてゐると感じた。なぜなら - - -

「...本当に?」

そこには、自分しかいないじゃないか。

「ええ。また一人で、楽しくやりましょーーーーーーあの男を排除してね」

一人の『紗祐』がボクを見る。

「樹はどうするの?..」

『制作者』は少し、憐れむような目でボクを見る。

「消えてもうしがないわね。彼がいると、私達は幸せになれないから。 - - - でも、心配しなくていいわ。すぐ、私が新しい彼を造つてあげるわ。紗祐」

ボクは、身震いした。ボクにとつてここでの
「死」
は現実の死と同義だ。

「…そ、さ。『めんね?樹さん』

木下が謝つてきた。

その目に、静かな光が灯つている。

その瞳を、ボクはどこかで見たことがある気がした。…どこかで、
見たのだ。

- - - その決意を。

「イヤ、気にしないでいいよ。それより、ナイフを降ろした方がいいんじゃないかな?」

ボクはそうアドバイスする。そのボーズじや何かと問題だろう。

『制作者』は、どこか嬉しそうに。

「観念したようね。最後は自分のナイフで逝かせてあげるわ。さ、紗祐、ナイフを貸して？」

『制作者』は木下に右手を延ばす。

「ええ、いろいろありがとうございます」「

木下も、右手を延ばす

ただし、ナイフを左手に持ち替えて、右手を後ろに廻はして、

「本当にありがとうございました。おかげで自分がどれだけ甘えた奴か、理解できた」

？」

そして、木下はいい笑顔で。

「くたばれや、私——！——！」

後ろに延ばした右手を思い切り――目の前にいる『制作者』の顔

面に叩きつけた。

それは田の覚めるような右ストレート - - - - !

私が殴りつけた『制作者』とやらは、机を巻き込みながら、派手に教室の隅まで吹っ飛んでいった。

：きつと夢の中だから、普段の三倍増しぐらいで強くなっているのだろう。

それよりも - - - 。

「大丈夫、樹！？」

樹はお世辞にも大丈夫とは言い難かつたが、それでもなんとか立ち上がった。

「あー、ちょっと堪えたけど、大丈夫」

たぶん、やせ我慢だらう。

「『めんね、私のせい』で…」

「木下のせいじゃないだろ？」

「でも、私がやった」とだわ

それは、きっと弁解できなことだらう。

「それじゃあや、これでキャラにしてくんない？」

「は？」

「お皿のわ

ああ、あれね。

「わかつたわ、レッスン分、一つ返済ね」

「これで一つ分なのか…」

「当たり前よ。美少女のお弁当は宝石より価値があるのよ。でもまあ、大負けに負けて、ケーキ一つ分で許してあげるわ」

くすくすと一人で笑い合つ。

「そついえば、最後の、よく私がしたいことわかつたわね

私はなぜか、彼が理解していたと言つ」とを確信していた。

「ああ、それはちょっとしたヒントがあつてね」

「ふーん…」

そつか、別に思いが通じ合つたから、つてわけじゃないんだ…。

「それよつ、どうするの…」

「え?」

いつのまにか、樹がナイフを持っていた。

「そつか、そういう問題も残つてたわね」

私は樹に向かつて手を延ばす。

「氣が変わつたわ。ナイフ、貸して」

樹は苦笑いでナイフを渡す。

「やつは自分のことば、自分でかたをつけないとね。誰かに選ばせよつなんて、やつや怒られるわ」

私はナイフを逆手に持つ。

「怖く、ないのか?」

「怖いよ? もつと現実に帰つたら、たぶん私は私で無くなる。おそらくこの記憶も無くなるまた痛いだけの毎日だ。だけど…」

「平気よ。私は。やりたい」ともしたい」とも・・・あつたみたい
だし」

夢を叶えるのは、やつぱり現実じやないと。

「これ以上は名残惜しくなるから」

樹の顔を見る。やはりなんともやりきれない顔になっていた。

だけど、よかつた。自分で決断できて、本当によかつた。

彼にこんな事を押し付けないですんで、本当によかつた。

キスくらいいじといつかと思つたが、お楽しみは後につてもくとし
よづ。

それじゃあね、と軽くウインクして私は、ナイフを胸に突き刺した。

それは、ひどく呆氣ないくらい。私が夢から覚めた瞬間だった。

ボクは、彼女が瞳を閉じるの見つめていた。彼女が鼓動を停めるの
を聞いていた。彼女がこの世界から消えるのを感じていた。

死者は、夢を見ない。

言い換えれば、誰も死んだあと的事を夢見る事はできない。

それが、ボクが夢を覚ます方法。

「死んで用覚めるのだ。」

さてと、では後始末と参りますか。

「もひ、いいんじやないか？ でてきても」

瓦礫の山にむかって声をかける。

「なにもかもお見通しつてわけ？ むかつくなね

ガシャガシャと瓦礫と化した机の中から『制作者』が顔をだす。

「ふん。紗祐は自分で決断したみたいね。これだけ発破かけないと駄目なんて、ほんとグズグズしてるわねえ」

「ホントに、キミ達は自分に厳しいな」

「『自分に厳しく他人に甘く』それが紗祐のモットーなのよ。……それがなきや、もつといつまへ立ち回れたのに」

「何事も、つまごむことないかなこり」

ボクは適当なところに腰をおちつける。

「いつから気付いてた？私が本気じやないって」

「学級日誌、改竄しなかつたら？それで、この『制作者』は味方なんだなと思ったのさ」

正確には、敵の敵、といった感じだが。

「やのわりに、まだつてたじやない？」

「そりやあ『制作者』に人格があるなんて思わなかつたからさ」

それはかなりのイレギュラーだった。あとで御影に聞いてみよう。

「IJの世界も限界みたいね？」

夢見る者 - - - 観客がいない以上、舞台は幕をおろさなくてはならない。

「ナムルタス、ウカモエヘ。」

「眠るわ。正直くたくなのよ、紗祐の相手は」

「ああ、よくわかるよ」

一人で少し、笑い合つ。さつきのように。

「貴方はどうするの？」

「ちゅうじゅある」とあるから、先に帰つてて

ガラガラと顔をたてて崩れる教室。

「セウ？ それじゃあお言葉に甘えて」

彼女が、世界に溶けていく、その前に - - - 。

「バイバイ、××顔」

誰だか知らない名前を言った。

辺りを見回す。

ボクが目覚める条件は二つ。

ボクのセツトした目覚ましが鳴るか、夢が終わるか。夢喰いとしての責務をまつとうするか。

このままなら、ほおつておいても夢は終わるけど、久しごとに食事とある。

それが - - - 本当の目的かもしれないし。

ゾワリと、ボクの中で何かが蠢きだす。

バクは彼女の見た夢を食べつくした。

「……なんで、泣くの？」

「じゃじゃ、わからなくなれる。アタシせせゆれこのじと好きたけじ。せゆれこせどりなんだね」

「…紗祐ちゃんは、それでもお母さんのことが好きなんでしょう？」

うん

「ボクは、その辺おゆれとのことでサリヤになると匪ひ」

111

「でも、それせわいひとつも寂っこいんだと思つただよ。今みたい
な泣いちゃうへり」

「うん… もうなったから、アタシも寂しこー、寂しかったから寂しこー」と歌ふ

「…………」

「だから、アタシはお母さんのこと好きでこづづかな。もしあも、お母さんがアタシのこと好きじゃなくても、」

「うふ」

「それじゃ寂し廻るから」

「紗祐ちゃんは…強いね」

「強い?」

「うふ。ひとつも。ボクにはひとつも、そんな田舎でやめことよ」

私が目を覚ましたとき。やつはベッドの上だった。

一瞬、なぜここにいるのかわからなくなる。

だけど、すぐ気がついた。

ああ、私、病院に運ばれたんだ…。

「気がついたかい?」

右横に目を走らせる。そこには限りなく黒に近いグレーのスースを着た、男の人が椅子に座っていた。

年は…二十代から三十代くらい。

かなり大胆に延ばした黒髪が印象的だ。

統合すると悪の理系幹部ね。

「 」、「 」

「 」は…と聞こえて喉に猛烈な痛みが走った。

「 ああ、無理しないで。君は三週間もん昏睡状態だったんだ。まず喉に水を通さないと」

そういうて男性は私にストローつきのペットボトルを差し出して、私の口につける。

水が喉通る。痛い。

「 私は御影評^{みかげひょう}吾^おといつてね。若輩ながら、 」の病院長を勤めてい
る

男は穏やかな笑顔を浮かべている。…なぜか、私にはそれが邪悪なものに思えた。

「 私…病院に運ばれたんですね？」

私はとりあえず、わかりきつたことだが、一応聞いてみる。

「 そ…君は…誤つて薬品を大量に摂取し、薬物の中毒症状でこの病院に運ばれたんだよ」

誤つて、か…やつことになつてゐるわけね。

見なくてもわかる。私の左腕は包帯でぐるぐる巻きだ。

「学校の先生も心配してたよ。昨日もお見舞いに来ててくれたね」

「お母さんね？」

私は、聞くべきではないと思つながらも、聞いてしまつた。

「お母さんは、来てるんですか？」

御影さんは、非常にこじこじへしゃつて。

「君のお母さんは…お仕事の都合で一時的に離れられたよ。」

「…やつですか」

わからなかつたことだつたけど。あきらめなかつたことだつたけど。

やはつ・・・。

「でも、君のことをとても心配してたよ。意識が戻つたら、いの一番に連絡をくれだそつだ」

それは、対外的な物言いだらけ。

「…やつですか」

やはり、苦しくなる。

もつ、何も願わないと誓ったのに。

「とにかく聞いておきたいことがあるんだけど、いいかい？」

御影さんは伺うよつた仕草で訪ねてきた

「もちろん、気分が優れなによつならあとにまわすけど」

「いえ、大丈夫です」

「すまないね。少し急ぐことだから」

「おそれく、私の自殺未遂のことだろつ。いくら対外的に事故になつていようが、ある程度の言及は免れない」

だけど、聞かれた内用はまるで違つた。

「晩睡中、君は……何か夢を見たかい？」

「はい？」

「夢だよ、夢。ドリーム。寝てるときによつて見る夢のことね」

それはわかるが、なぜにこのタイミングで？

私の疑問を察したのか、御影さんは説明に入る。

「君は二週間も昼夜睡し続けていたんだよ？昼夜なんて、一週間も続ければ立派な植物人間だ。だけど君の脳には、まったく以上はなかつたが……一つ、奇妙な点があった」

「なんですか？」

「君は、夢とこうものはいつ見るものか知っているかい？」

「？寝てる時？じゃないですか？」

「まあ、確かにその通りだけど、専門的に言つて、REM睡眠中という。知つているかな？」

…ああ、それなら知つている。

REM睡眠といつのは人間の睡眠中の行動の一つで、浅い眠りの状態のことをいう。

主に、夢を見るとときはREM睡眠中なのだそうだ。

「知つてこます。夢を見るときの浅い眠りのことですよね？」

「その通り。博識で助かるよ」

御影さんはまだ居がかつた仕草で私に拍手をした。
…早く先に進めてほしい。

「さて、そのREM睡眠だが、普通は何時間か周期に、浅い眠り深い眠りを繰り返すのだが、君の場合……」

御影さんはそれで一回切り、私を覗き込むよつこじて、続けた。

「ノンREM睡眠といふREM睡眠の時が明確に別れていた」

「言つてこないことがよくわからない。」

「普通は何時間おきにランダムに入れ代わるもののが、君の場合、朝と共にノンREM睡眠になり、夜になるとノンREM睡眠に移り変わった」

「……」

「多少のタイムラグはあったとはいえ、それは三週間同様に続けられた。まるで……夢の中で生活しているかのようだ」

私は、今まで見ていた夢を思い出さうしたが、……どうしても思い出せない。

「何か、思ひ出せる」とはないかな?…どんな些細なことでもいいんだ」

「…すみません何か見たような気もしますが、…思い出せません」

「せうか…イメージだけでもいいんだが

「いえ、何も…覚えていないです」

御影さんは何か、難しい顔をして頷いた。

「まあ、気にする必要はないよ。夢なんものは - - 覚めてしまつたら、消えてなくなつてしまつところに、その価値がある」

「どいか、自嘲氣味に嘆いた響きがあった。

「わい、長話をしてしまつたね。これ以上は体にさわる。今は少し休む」とだ

やつこつて御影さんは席を立つ。

「あとで担当の医師を向かわせる。何か必要なことがあつたら彼女に言つてくれ - - 多分、検査づけになると困つたゞな」

軽くウインクされた。

ちよつと、ぞくつとする。

「それではね。紗祐ちゃん

名乗つた覚えはないが、それくらいは知つているか - - 母親も、一度来たみたいだし。

「はい。どうもあつがとうございました」

御影さんも一度礼をして出てこいつする。しかしその前に。

「 - - ああそうだ。なかなかカワイイ寝顔だつたよ

と言つながら部屋から出でていった。

私はその時、この部屋が個室だったのと、話していた人物が私が起きたまで、女の口の寝顔を覗き込んでいたヤツだったということを知った。

ボクにはボクの人生があるように、木下紗祐には木下紗祐の人生がある。

それにどうやって自分自身に折り合いをつけ、付き合っていくかが問題になつてくるわけだけど、人付合いというのは、自分自身も含めて、誤解と思い違いとすれ違いの連續だ。

- - - 思えば、木下紗祐はそれが積み重なつた少女だったのだろう。

ボクは今、ある病院のトップがいる部屋。いわゆる院長室にいる。

そこには、やけに立派なデスクに、応接用の高級なソファーテーブル。横には精神系や神経系の本が入つた本棚が立つている。

この部屋の主は『一応、立場上ね』と言つていたが、本人もこの部屋は気に入つてゐるらしい。

ボクはソファーに座り、その主を待つてゐる。

しばらくすると、『これまた高級そつなドアから、一人の男が入ってきた。

ヒョロリとした長身。180は軽く越えている。いつも通り背中まで延ばした長髪にダークスース。そして……室内だといふのに、丸いサングラスをかけている。

「やあやあ、待たせてしまったかな？樹君！」

いつも通りの芝居がかつた口調。間違いない、御影評吾だ。

「いえ、別にそれほど待つてないですよ、御影さん」

「そうかい？ いやあカワイイ女の口と話し込んでしまってね。年甲斐もなく時がたつのも忘れて楽しんでしまったよ」

御影はボクの向かい側のソファーに腰を降ろす。

「どうでした？木下紗祐の様子は」

御影と話していると、田がくれる。せつと話しあを進めてしまおう。

「うん？ ああ、綺麗なものだつたよ。なにも、覚えていなかつた

「そうですか」

食べ残しは、なかつたか。

「わい、わいわいおやなつにすましてしまつたが、今回の説縄ひついて聞く」ひつか

ボクは順序だてて、
御影に見た夢を説明する。特に『制作者』のあ
たりを重点的に。

話しを聞き終えた御影は少し、考え込むような顔をする。

「御影さん。何かわかりますか？」

「意識をもつた無意識ね。」：仮説がないこともないんだが」

「どんな?」

「樹君は、彼女がどんな理由でここに運ばれたか知ってるかい？」

「直接の原因は、薬物の大量摂取じゃなかつたでしたっけ」

「そう、その通り。だが、彼女の摑っていた薬物とは何だと思つ?」

「麻薬、ですか？」

とたん、イヤな想像が頭に巡る。

しかし御影はそれを一笑にふした。

「いやいや樹君。心配しなくててもいいさ。彼女は薬を日常的に服

用していたが、その中に麻薬めいたものはないよ。あつたのは普通に病院で処方される薬だけだ」

「ホツとする。ボクと木下紗祐は赤の他人だが、なぜか、気になつていた。

「薬が原因じゃないんですか？」

「いや、原因の一端になつた…といったところかな」

そういうて御影は少し間をおき、説明を始めた。

「木下紗祐は極度の鬱病を患つていたよつだ。それこそ、抗鬱剤を多用するほどに」

それは知つていた。木下紗祐は一年前から、精神科の病院に通つているとプロフイールに書いてあつたから。

「「」の患者に多く見られる症状なのだが、彼女はO.Dと呼ばれる…簡単に言うと医師が処方した薬よりも多くの薬を摂取したがる、薬物依存を起こしていた」

薬物依存。しかし、いくら普通に病院で手に入るものとして、そんなものは普通の高校生が手に入るものなのだろうか？

「「」からが本題なんだが、樹君は分裂症というのを知つているかな」

「多重人格とか、そういうものですか？」

「近いが、違う。これも鬱病患者に多い症例なのだが……いわゆるペルソナと言われるものだ」

「ペルソナ？」

「わう。ペルソナ。仮面。パーソナルの語源。つまり彼女は自分の中に、自分とは別の考え方をするキャラクターみたいなものを作り出していたんじゃないだろうか」

夢の中の木下紗祐は、よく笑い、よく怒る女の「だつた。

しかし、それは本当の……

「重度の患者になると、鬱と、そうでないときではほとんど別人のようだ。記憶さえ引き継がないこともある。おそらく、木下紗祐の中でも、同じようなことがおきたのではないかと思つ

「御影はそこで息をつく。……コイツにも他人を哀れむという感情があるらしい。

「無意識、というものは常に何かを生産、処理しているものだ。彼女の中で、別の意識が生じたとしても、何ら不思議なことではない」とことだ」

御影はそこで言葉を切る。説明はここまで、あとは自分で考えるとことだ。

「わかりました。ありがとうございます」

知りたいことは知った。ならこんなところからはせつねと帰ろう。

ボクが帰ろうとすると御影が呼び止めた。

「待ちたまえ樹くん。木下紗祐の母親と面談したんだが、その時の話しへ聞きたくないかい？」

「興味はなかつた。だけど、聞かなくちゃいけない気がした。

「どんな内用だつたんですか？」

御影は視線を外し、呟くように言つた。

「自分の子供が自分の子供とは思えないそつだ」

「…………」

「彼女は、きっと母親になるべきではなかつたのだろう。自分の人生が一番楽しくて、あとのものは不隨物。もしくは厄介物だとでも思つてこるようだつたよ」

「…………」

「自分の人生が一番カワイイ、か。…そつ思えるのなら、どんなに幸せだらう。

他人の人生をないがしろに生きるとは、どんなに不幸なのだろう。

「あの母子の最大の不幸は、母と娘がこれまで失敗をしなかつたと

「うーん。これにつきるんだろうね」

「あの母親は、それまでその人生観で生きてきました。…ほんの少しの躊躇もなく、うまくいってしまったのだ。自分は正しいのだと思つくらいに」

そして…木下紗祐は、その母親に気に入れられようと、必死になつて努力した。母の人生を邪魔しない。手のかからない、いい娘として。

…なんて滑稽な親子だろう。

きっと、母の目には、自分の人生を楽しんでいる幸せな娘に見えていたのだろう。自分のためだけに努力してきた人間は、誰かのために努力するなんて人間がいることは、理解できないのだ。

「ここにきて、長年の歪みが顕れたということや。自業自得とつてしまえばそれまでなんだけどね」

やはり、最後のセリフは御影らしい。

誰にも、容赦なんてことをしない。

「木下紗祐についてもの母親についても、よくわかりました。しかし、もうボクには関係のない話しながら、これで失礼させてもらいます」

今度こそ、席をたとつする。

「そこを一度田になる御影の制止がきた。

「まだだよ。ここからが君にも関係ある話し何だから」

ボクにも関係ある話し?

「木下紗祐。」の名前には聞き覚えはないかい?」

「? いえ、ありません」

完全に、初対面のはずだ。 - - - いや、正確にはまだ会っていない。
「そうか…。君がこの仕事を受けたのは、これが理由かと思つたんだが…。流石にそんなに偶然は重ならないか」

「一体、なんのことなんですか?」

ボクは少し、イライラしながら聞いた。

「彼女が通つていた小学校は、君が通つていた - - そう、君がまだ『森山樹』と名乗つていたときの、小学校に通つていたらしい」

「同じ…?」

「そう。しかも同じ学年だつたんだ。話したこともあつたんじゃないか?」

ボクは過去の記憶を思い返す。もしも、ボクと彼女に何か接点があつたのだとしたら - - - ?

「…なにも覚えてません。オレがあの小学校に通つていたのは9才

までですか？」

だとしたら、なんだ。別にそんなものに意味はない。過去の自分に何かあつたところで。それが何だっていうんだ。

話しあはすべて終わった。ボクはそうそうに帰宅する顔を浮かべると、一人家路についた。

御影から『夜遅くなってしまったから送つていこう』という提案を全力で断り。終バスにゆられながら、ボクはこれからについて考える。過去については考えない。

そうだろうつ・木下。

バスは目的地へとゆっくりと走っている。

…体中にまだ痛みが残っている。御影いわく、夢の中とはいえ、一度脳が『ダメージを受けた』と認識すれば、必ずそれは体にフィードバックされると。

…素直に御影に送つてもらえばよかつたかなあ？

「フィードバック？」

その時、ボクはあることを思い出した。

過去は、例え忘れてしまっても、必ずそれは現在に反映される。過去と現在が繋がっているのなら尚更だ。

「……まして、それが未来となると。」

「……とりあえずメシにしよう。」

忘れているが、ボクは朝から何も食べていないのだ。御影の部屋においてある食べ物は極しくてとても食べる気にはなれないし。

これからのこと、このあとのこと、今は考えるの止めよう。

ボクにできること、限られているのだから。

「えつとわうねバイバイ森山君」

「やあ、帰らなくちゃね

「サヨナラ。紗祐ちゃん」

「また明日ねー。」

「…つぐ、また明日ー。」

懐かしい夢を見た気がした。目が覚めたときにはその夢の余韻しか残つていなかつたけど、それはとても大切なものだつた気がした。

なぜか、わけもなく切なかつた。

学校は退院してから辞めてしまった。いろいろ噂もたつたし、ドロップアウトする生徒だつて少なくない学校なのだ。

なにより、私がそこにいたくないと望んだ。

大検を受けるから、と説明して、高校を辞めたいと話したときも、

母は別に反対はせず。『好きにしたら』とのことだった。

それから私は開き直つて。毎日をしたいように生きている。バイトをしたり、新しくできた友達と遊んだり、やりたかったことをしてみたり。

今なら、少しだけ母のことも理解できる。

あの人は本当に、私の好きにしてほしかったのだろう。自分のような楽しい生き方をしてほしかったのだろう。

ただ、あの人は、自分だけしかそこにいなかつたから、誰かを鑑みることはなかつた。

私には母のような生き方はできないけど、決して、同じようにはなれないけど。

もしかして、誰かと痛みを分かち合えない母は、私なんかよりも、よっぽど不幸だったんじゃないだろうか？

私と母の関係は今まで通りだ。たまに連絡があつて、たまに連絡する。そんな感じだ。

やはり寂しさはぬぐえないけど、私は、私のためにも頑張ると約束したのだ。

-----その約束が誰とのだったのか。もしくは自分自身とだったか。それが思い出せないが。

私は私らしく、誰かのためなんて言い訳せざ。生きてこいつと決めたのだ。

外を見る。今日はいい天氣だ。こんな日に一人で家にいるのはもつたいないから、どこかに出かけよう。

「それで、やることとこったら、喫茶店で一人で勉強とわね……」

そう独り言をぼやく。

予備校での模試が近いのだ。一足先に受験勉強を始めた私には、休日とはいえ休みはない。

まあ、見よつによつては、毎日が休日だといえなくもないが……。

まだお昼前の時間。店内にはお客様はほとんどない。静かなものだ。

何とは無しにペンをフラフラさせていると、店内にカラーンとこう音が響いた。どうやらお客様さんのようだ。

ドアの方を見る。

男の一人組だった。

二人とも私と同じ年くらい。一人は長い髪を明るい茶に染めていて、日焼けはないがいかにも『遊んでる』風のニヤニヤした少年と、目にかかるくらいの癖のある長い髪をした少年だった。

「いらっしゃいますー」

ウエイトレスさんがパタパタと一人に近づく。

「2名でーす」

茶髪の少年が明るく返答する。

『…だけど、こんな時間に男一人で喫茶店とは冴えないわねえ。』

と、少し剣呑な目線を送つたら、癖毛の少年と目が合つてしまつた。

しまつた、恥ずかしい。

よくよく考えたら、こんな時間に一人で勉強してる自分も同じくらい冴えないぞ…！？

いたたまれなくて目を伏せる。

幸にも、ウエイトレスが通した席は私からは見えない席らしい。

少し、ほっとした。

窓から外を見る。まだ時間が時間のせいか、人通りは全くない。

お昼まで、ゆっくりとここで過ごそうと考えていたら、カラシとま

たドアが開く音がした。

田をやると、ビーナリカの一人組が帰ると、ソーリー。

茶髪の少年は困った顔でウエイトレスに謝るような仕草をしながら出ていく。どうやら癖毛の少年の方は先に出ていったらしい。

ていうか、まだ入って5分とたってないぞ？それなのに急に店を出るとは、何かあったのだろうか？

興味深げに見ると茶髪の少年と田が会う。

なぜか向いでは『しまった』といつた顔をして出ていった。

……？

私、何かしたのだろうか？まさかやつとの私の田線を気にして帰ることにしたのだろうか？

だとしたら、少し悪いことをしたのだろうか？

そんな、冴えない度は同じじゃないか……！

そう一人で葛藤していると、ウエイトレスさんがこちらへやってきた。

「失礼します。こちらは苺のマースケーキになります」

え？頼んでないけど。

「すみません。間違いじゃないですか？頼んでいないんですけど…」

「するとウエイトレスさんは悪戯っぽい笑顔で。

「今出でいかれたお客さんの方からです。料金は頂いておりますので」

は？今の一組から？

「な、何ですか？」

「なんでも、『お弁当の借りを返す』だそうですが…」

お弁当の借り？そんなことは…心あたりはない。

「もし、なんでしたらお下げ致しますが？」

私がよっぽど微妙な顔をしていたのだろう。ウエイトレスさんが聞いてくる。

「い、いえ。いただきます」

「そうですか。失礼いたします」

そういうウエイトレスさんは下がつてこぐ。

……………わて、どうよつか？

正直、あの一人に見覚えはない。だけど、何か、引っ掛かる。知っているのだけど、覚えてない。そんな感じだ。

そう、例えるなら今朝見た夢の後のような - - - ?

まあいい。もらえたものは、もらつておこう。

そう単純に思考して、ケーキを一口食べる。

うん。おいしい。

唐揚げがこんなおいしいケーキに化けるのなら、もつと違う料理も食べさせればよかつたかな？

くすり、と笑う。

唐揚げ……？

ふいに

涙が

零れた

忘れていたものを - - - 思いだしかけた。

なくしていたものを - - - 取り戻しかけた。

涙が零れる。

だけどそれは一瞬すぎて。

人の夢のようにはかなく、私の中から消え去つて。

- - - 一度と戻つてこなかつた。

ボクはウエイトレスに頼み事をした後。一度も振り返ることなく店を出た。

木下紗祐とは、一つだけ、約束があつた。一つだけ、借りがあつた。

だから、それを返すことにしてたのだ。

これで - - - ボクと木下紗祐の接点はなにも無くなつた。

伏線は全て回収した。

だから、もう会つことは真実の意味、ないだろ？。

もう一度と、ないだら。

「おこ待てよ摸本！」

一緒にいた友人が追い付いてくる。

「なんなんだよ摸本？ 急に女にケーキなんておこったつしてや」

「別に……ちょっと借りがあつたから、返しただけさ」

「借りつて、お弁当を！」駆走になつたことにたゞする

「やつだよ。うまかった」

ただし、夢の中の話しだけ。

「ふーん……ずいぶんプレイボーイなんですねー。摸本くんつたらー！」

ハジケんばかりの笑顔を向けてくる。

…「マイツは何が楽しいのか。

「そんなんじやないわ」

そう、そんなんじやない。

これは、単なる、つまらない後日談。

夢の如残のようなもの。

夢の余韻のようなもの。

だから全てを消し去つた。

夢は - - - 覚めてしまえば何も残らないところにその価値がある。

現在に続く夢なんて、ましてや未来を形作る夢なんて、消え去つてしまつた方がいい。

このボクが関わつた夢なら、後にはなにも残らない。

だから、もう一度と会つことはない。

もしも、会つなら夢の中。

あの、夕と夜の間。そのわずかな時間に会つてしまつ。

それまで、キミが寝るまでボクは起きてこよう。

だから - - - 。

「サヨナラ、紗祐ちゃん」

言葉はとても小さく辺りに響き。誰も、それを聞く者はいなかつた。

「これは、語りれる」とのない思い出せない思いで。

当事者である二人は夢喰いに食べられたわけでもないのに、記憶の奥底に埋没してしまった、わずかな時間だけ交わした会話。

この会話をした少年は次の日には転校してしまったし、少女の方は毎日必死過ぎて、気にとめることもできなかつた。

だけど……。その決意は、覚えている。

結局その決意が間違つていたのかもしれないけれど。

彼が忘れても。私さえも忘れてしまつても。

決して、忘れないなかつた私がいる。

だから - - - これはそれだけの話。

夢喰いや夢使い。ましてやもつと巨大な流れにまでふれたと云ひの
に、結局のところは - - - 。

少し疲れて眠っていた少女が、起きて再び歩き出す。

本当に、それだけの、それやかなお話。

後には続く。詰まらないお話し。

【Kinoshita Sayu Limited Brake
Normal End.】

（後書き）

実はこの「バクが見る夢」は本編+番外編四話があつて、この話しは番外編その1にあたります。なんでこれを一番最初にもつてきたかといふと、これがストーリーとして一番短かつたというそれだけの理由で。次は、本編の方を書きたいと思つています。…ヒロインが名前さえ出てきてないし。あと、今回の話しさかなりのダイエット版になつてるので、できれば加筆修正したいと思います。（ストーリーに変更はありません）それでは、読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5129a/>

バクの見る夢 CASE 2

2010年10月8日12時52分発行